平城宮第一次大極殿院の設計思想

Concerning the Design Concept in the Former Imperial Audience Hall of State Compound
In Nara Palace

内田 和伸*

Kazunobu UCHIDA

Abstract : I indicated that the plan of the earthen wall with brick tiles on the Former Imperial Audience Hall of State Compound in Nara Imperial Palace was designed with three concentric circles and the eccentric circle, and this structure is similar to the astronomical chart of mural of Kitora Tomb. On this report, we can find the Chinese ancient thought that the buildings and the layout of establishment in the Palace area imitate the cosmos in the MONSEN anthology. The planners appreciate that the throne “Takamikura” was located at the center of the world and the throne fit on the ornament ceiling. The pair forms the turning pole “Ame-no-Mihashira”. On the Former Imperial Audience Hall of State Compound in Nara Imperial Palace, the number on the plan related to the calendar and the cosmos. This design show that Tennou manages the time and the cosmos in his national land same as Chinese emperor.

Keywords: *the Imperial Audience Hall of State Compound, the Former Imperial Audience Hall of State Compound in Nara Imperial Palace, Design Concept*

キーワード: 大極殿院, 平城宮第一次大極殿院, 設計思想

1. はじめに

平城宮第一次大極殿院では、その前庭の埴積擁壁の平面プランが高御座を中心にした同心3円と、その北側に中心を持つ偏心円の交点を用いて設計施工していること、それがキトラ古墳の石室天文図に描かれるような宇宙の構造を象ることを指摘した¹⁾。また、大極殿院回廊の東西、南北の規模(尺長)は意味をもつと思われる数値の倍数を基本に構成されていることを指摘した²⁾。さらに、奈良時代半ばの難波宮出土の重弧文軒丸瓦は同心3円をなし、宇宙の構造を象ったものであり、中央の右裏字は天が降すめでたい徴(乾符)をデザインしたものであることなどを指摘した³⁾。こうした指摘は中国風の宮殿の現存しない日本においては違和感をもって受け止められているのではないかと思う。

庭とは、古くは廷だけで人が廷立している意をなし、座敷(堂)前の広場の意をもつ。天子が南面するのに対し、臣下が北面して立つ所であった。庭園という言葉のうち、苑としての園の研究蓄積は多いが、庭のそれが充分ではないのは取り囲む建築群との関連を捉えることが難しいことも一因と思われる。宮殿の前庭は宮殿全体の中に位置づけられているため、庭部分だけを取り上げても充分には理解できない。第一次大極殿院の設計思想や施設配置、大極殿前庭の埴積擁壁のデザインを理解する上で極めて重要なものが、埴積擁壁のデザインに用いた同心3円の中心点と、そこに位置すると推測される高御座、これを内包し中心を達える大極殿である。これらが宮殿の設計思想全体の中でどのように認識されていたかを明らかにし、大極殿院や前庭を理解する一助としたい。

以下では、平城宮第一次大極殿に大きな影響を与えた、長安城太極宮太極殿の設計理念について整理する。次に、漢籍をみて都城や宮殿の設計思想の藤原宮・平城宮への影響について考察する。さらに、こうした設計の原理に従って大極殿をみると、その室内に設置される高御座の形態や装飾、大極殿の天井や屋根形態、同時代に編纂の進んでいた記紀神話についても新たな視点で若干の解釈を加えることもできたので報告する。

2. 長安城と太極殿の設計思想

妹尾達彦⁴⁾によると、隋唐長安城には以下のような様々な伝統的思想が盛り込まれ、これらは密接にかかわって個別に分析できるものではないとする。

- ・地上における宇宙の鏡として都をつくりだす天文思想
- ・王朝儀礼の舞台として都をつくる礼の思想
- ・中国古来の『周礼』の理想都市モデル
- ・陰陽五行思想
- ・王者にふさわしい土地を鑑定する『易経』の思想

物理的・天文学的宇宙論と世界認識としての宇宙論は未分離であるが、前者を含む当時の世界認識である宇宙論に基づいて天命を受ける宇宙の都として隋唐長安城は建設された。王都を聖別化して、支配正当性の確立をめざしたのである。天文学的な宇宙論には蓋天説と渾天説があり、前者は天は円く地は方形で、上下に天と地が位置し、北極を中心に回転するとした。後者は宇宙を球形すなわち天球座標として把握するもので、天の運行を合理的に説明するが、一般の人は理解しやすい蓋天説を信じた。宮殿南方で天を祭る祭壇(圓丘)での儀礼と、宮殿南の広場での朝会の儀礼の重視が、王都における宮殿配置を西南から北方へ変えた。長安は円い天の中心と四角い地の中心の交差する点に立地していると観念され、その交差点は隋の大興殿、唐の太極殿と考えられた。

その名、太極殿の太極は『易経』の用語で、混沌とした宇宙の原始的状態、太極殿北側の両儀殿の両儀は、その太極から生じた万物の根元である陽と陰、ないし天と地を意味している。また、太極は天文占星思想では、北極星周辺の星座を意味し、紫微宮の中核をなし、宇宙の最高神である天帝の常居と考えられていた。後漢から北辰・北斗信仰が盛んになり、北極星への絶対視が強まって、宮城の正殿としての太極殿の名称は魏から現れる。さらに、天帝が道教の最高神でもあるため、太極殿をはじめとする建築群は天上の神仙界が地上に投影されたものとなる。

太極殿から南へ延びる都市プランの軸線は儀礼の軸線でもあり、

*奈良文化財研究所飛鳥藤原宮跡発掘調査部

礼による秩序を視覚化した。太極宮は天の中心と地の中心を結び合わせる空間と観念されていたのである。

3. 漢籍にみる都市・宮殿等の設計思想と日本への影響

上記のような設計思想が如何に伝わったか否かを、直接示す文献はない。漢籍をみて、『日本書紀』『続日本紀』『古事記』などへの影響を考えることにする。この章では、『文選』の引用が多いので、あらかじめその概要と影響をまとめておく^{5) 6)}。

『文選』は、中国の南北朝時代に南朝梁の武帝の長子、昭明太子蕭統によって編纂された。周代から梁まで約千年間にわたる131名の763篇を収める現存最古の一大詩華選で、六朝文学を代表する総集である。優れた文章・詩・論文を集め、800余りの文章が収録されている。その収録作品を三十七の文体に分類し、さらに、主題ごとにいくつかに分類している。中心は賦と詩で、旋律によらないで朗誦するのが賦である。譜の内容は叙事的なものも叙情的なものも含み、修辞とともに論理的に構成され、思想と一体になっているという。漢代の京都（みやこ）の賦の系統のものは美辞麗句を並べた帝王賛歌ではあるが、帝王や王室に対する風刺も込められている。「兩都の賦」（「西都賦」と「東都賦」）や「二京の賦」（「西京賦」と「東京賦」）は為政者の文教政策を意識した長安・洛陽の都市比較論である。これらに習いつつも事実には則することに留意して創ったと序で述べるのが魏呉蜀三国の都を謳った「三都の賦」である。

『文選』は中国でも後世の文学に及ぼした影響も大きいが、日本へも早くに伝来し、推古天皇十二年（604）の『十七条憲法』に影響しているとされ、『万葉集』や『日本書紀』をはじめとする我が国の文学に多大の影響を及ぼした。平城宮跡や秋田城跡出土木簡によって、遅くとも奈良時代半ばには下級官人が本書を利用し、教養を培っていたことが知られる。

（1）都市・宮室の中心と測量

①『文選』張平子作「東京賦」

「東京賦」は、漢代の質素儉約な洛陽を頌えたもので、次のように記される⁷⁾。以下、（ ）内に通釈を記した。

「彼偏據して小を規りしも、豈中に宅て大を圖るに如かんや。昔先王の邑を經るや、九隄を掩観て、地として營らざるは靡し。土圭景を測り、縮まらず盈たず。風雨の交わる所を總べ、然る後以て王城を建つ。曲面勢を審にす。洛に汜河に背き、伊を左にして瀍を右にす。（秦は関西の地にかたよって都して、心づもりは関内の小地区内に止まったが、東漢は天地の中央に都して、もくろむは四海の外に広がる大天下。これには秦もどうしておよぼうか。昔、周の成王が洛陽を經營された時、九州の内をあまねく調査し、地という地を測量され、適当な地を求められた。日影を測る玉器を使って、求むるは、日影の短からず長からざる土地。あわせて風雨のほどよく去来する土地に、はじめて王城は建てられた。土地の曲直、方向、地勢の三つを詳しく計算して結論を出し、洛水に面し、黄河を背にし、伊水を左にし、瀍水を右にした地点に王城を設ける。）」

周代、太陽観測用の八尺の表（柱）を立てて、夏至の正午のその影が影の長さを測る土圭の長さ（一尺五寸）と一致すれば、それは天下の中心に当たるとされた。土圭より影が長ければ北に近く、短ければ南に近く、気候もそれぞれ暑さ寒さが多いとされ、その地に周の成王が都を建てたという。

同じく、「東京賦」後漢の光武帝と明帝の国造りに関しては、「區宇おさまり寧く、和を思ひ中を求む。睿哲玄覽して、茲の洛宮に都る（四海の内は、よく治まり安らかになり、願うは、陰陽のほどよく調和する土地、求めるは、天地の最中に当たる土地。聖哲の天子光武帝は、天下のすべての地を洞察なされて、選んだこの洛陽の宮殿に在される。）」

陰陽が調和すると自然の秩序も人事の秩序も安定するため、それを思うことを思和といい、周代も漢代も天下の中心を求めて洛陽に都を建てたという。

②『文選』左太冲作「魏都賦」⁸⁾

「爰に初め臻りし自り、言に其の良を占う。龜に謀り筮に謀りて、亦既に允に臧し。其の郭郭を修め、其の城隍を繕む。經始の制、百王を牢籠す。雍豫の居を畫き、八都の宇を寫す。茅茨を陶唐に鑑み、卑宮を夏禹に察る。古公草創して、高門閭たる有り。宣王中興して、室を築くこと百堵なり。聖哲の軌を兼ね、文質の状をあはす。豊約を商りて折中し、當年に准へて量を為す。重爰を思ひて大壯に募り荀卿を覽、蕭相を采る。拱木を林衡に倂へ、全模を梓匠に授く。遐邇悦豫して子のごとくに来り、工徒擬議して巧を購す。鈎繩の筌緒を聞き、二分の正要を承く。日晷を揆り、星耀を考ふ。社稷を建て、清廟を作る。（魏公曹操が、最初にこの地に足を踏み入れた時、吉凶を占ったところ、亀甲も筮竹も、実に良い結果を得たので、内外の城壁や堀を修繕し、都市を建設した。その建設計画は、多くの王者の都市を兼ね合わせ、長安・洛陽をなぞり、八方の都市を参考にした。堯帝が屋根の茅すら切り揃えなかったことを見ならい、夏の禹王が低い宮殿を造ったことを思った。古公亶父が周を建国した時、高い門を建て、周の宣王が中興を果たして、百丈の宮室を造ったことも考えた。聖賢たちの事蹟を総合し、華美と質樸の両面をそなえ、豊かさや儉約の中庸をとり、時世にあうように規模を定めた。易の大壯の卦に則り、荀子の書や蕭何の故事を考慮にいった。林の管理役に命じて大木を供給させ、全体の計画図を大工たちに示した。すると、遠近の民衆たちは、喜んで、子が親の手伝いをするようにやってきた。建設者たちは議論を重ね、技術を尽くした。コンパスや墨繩を手順に従って用い、春分と秋分の太陽の位置によって正しい方位を定め、太陽の位置、星の位置を計測し、土地の神、稷物の神、そして先祖を祀る廟を建設した。）」

都の建設では亀甲も筮竹も行い、易にも従って、方位を定める測量をしている。蕭何の故事とは、前漢の高祖の時、未央宮ができ、贅沢ではないかとの高祖の問いに丞相蕭何が天子の威光を示すためには大規模な宮殿が必要だとしたことである。神亀元年（724）11月8日条の太政官の奏上に宮殿は立派でなければ徳が示せないとあるが、こうした考えによるものと思われる。

③『呂氏春秋』慎勢

秦の宰相である呂不韋が編集した『呂氏春秋』慎勢には、「古之王者、挾天下之中而立国 挾国之中而立宮 挾宮之中而立廟」とある。天下の中心を選んで国を建て、国の中心を選んで宮室を建て、宮室の中心を選んで廟を建てるというのである。

中国古代の都市計画は「思和求中」の思想が大きく影響しており、天下の中心を選ぶということは「四方入貢道理均」とあるように四方からの入貢の道程を等しくして王の徳を表そうというものである⁹⁾。

『日本書紀』神武即位前紀己未年三月丁卯条に「觀れば、畝傍山《畝傍山、此を宇祢摩夜摩と云ふ》の東南の樞原の地は、蓋し国の塙区か。治るべし」とある。畝傍山の東南の地は国の真ん中であるとし、そこに都を造るべきとする考えには、前述の思想が影響したと思われる。

ところで、藤原京は近年の発掘調査により藤原宮を中心とした十条十坊、約五キロ四方の方形で、『周礼』『考工記』に記される理想都市を実現しようとした理念先行の都と考える説が有力である。藤原宮跡の発掘調査では藤原宮の遺構より下層に藤原京の先行条坊が検出されている。『日本書紀』に京師・新益京と記される藤原京の造営は天武五年から行われたようであるが、順調には進まず、天武十三年（684）三月の「京師を巡行して宮室の地を定む」と記した、藤原宮の位置が確定したという記事はこれに遅れること八年である。小澤毅¹⁰⁾はこのことを地形条件などから宮

室の位置は決定していないはずはなく、この記事は宮室の位置を決めた儀式と見ている。『呂氏春秋』慎勢には国の中心を選んで宮室を建てるとはあるが、国の中心を選んで都をつくり、都の中心を選んで宮殿を造るとはない。しかし、ここで注目したいことは、藤原京の施工実態が、この古典の文脈に従って忠実に宮殿をつくっているのではないかと思わせることである¹¹⁾。

④『詩経』「国風」「定之方中」

周代成立の『詩経』「国風」「定之方中」は宮室の造営と測量技術について述べている¹²⁾。

「定の方に中するとき 楚宮を作する

之を揆るに日を以てし 楚室を作する (以下、略)」

とある。定は二十八宿の「宮室」で、これが南中するときに楚丘の地に宮をつくる。日を測り、方位を定めて楚丘の地に宮をつくるのである。

時代は下って、『続日本紀』和銅元年(708)2月15日の平城遷都の詔に「揆日瞻星。起宮室之基(日を揆かり星を瞻て、宮室の基を起こす)」とする部分がある。これは、太陽観測用の八尺の表(棒)を立て、これを中心に円を描き、表の頂部の影の軌跡が朝夕で交わる部分を結ぶと、それが東西軸になり、次に北極星を観測して南北軸を求める測量技術であり、これなくして東西、南北は決められない。もっとも、この遷都の詔は『隋書』高祖紀二年六月丙申条にみえる新都創建の詔を多く引用しながら作られていることがよく知られており、この部分も引用である。実際、平城京の施工実態は、奈良盆地を南北に縦断する下ッ道を拡張し、羅城門から朱雀門に至る朱雀大路を敷設しており、若干方位の振れる既設の道路に規定されている。それでも平城宮の中核部を抜ける南北中軸線は第一次大極殿と大極殿院磚積擁壁の設計施工に用いた同心3円の中心が載るのである。

以上みたように、日を揆かる測量して国の中心に宮殿を建てるのである。第一次大極殿院で高御座の設置される位置から円を描いて磚積擁壁を設計施工していることは、日を揆かる測量と儀式をそこで行っていることを暗示するようにも思われる。

(2) 建物の単位

「西都賦」には、漢の長安城の宮殿の造営は『周礼』考工記に九尺の筵を度とするという、周の古法に則るものであることが記され、「東都賦」にみる漢の洛陽城も同様であった。施工段階での調整もあろうが、藤原宮大極殿院の規模について基本計画段階では回廊の心々で東西405尺、南北540尺で、9尺の倍数であることを指摘した¹³⁾。藤原京が『周礼』に基づく都市計画であるならば、その中心の大極殿院についてもこれを意識したことは充分に考えられよう。中心建物の基壇高について『周礼』では9尺であったが、大極殿についてはそれを直接示す史料はない。

(3) 中心建物の天井

(i) 藻井とは

中国の伝統建築に用いる天井には、化粧屋根裏(露明天花)や鏡天井(海漫天花)の他、宮殿や廟などの大型建物に用いる格天井(井口天井)や藻井(裝飾天井)がある。藻井は天井が一段高くなったもので、中心を際立たせ、崇高な室内空間を構成する上で大きな効果を果たした。紫禁城(現在の北京故宮博物院)正殿の太和殿や天壇(北京)の祈念殿などにも藻井が設けられている。

隋代の『大業雜記』(『指海第三集』)「元年・東都大城」に東都洛陽の紫微城正殿の乾陽殿に関する記述がある。基壇の高さが九尺であることなどに加えて、「倚(綺)井垂蓮」と述べて、藻井に蓮の花の彫物が垂れ下がっていたことが知られる¹⁴⁾。時代は下るが宋の徽宗のとき、将作監(都城・宮室・宗廟・陵寢など土木・建築工事を司る役所の長)であった李誠(りかい)が当時の建築技術を系統的にまとめた編著書に『营造法式』がある。この書に藻井は、下部は方井、中間部は八角井、上部は円形で、頂部には

垂蓮か、彫華雲捲などの装飾が施され、鏡が取り付けられることが記され¹⁵⁾、現存するものと極端に異なることはなさそうである。

(ii) 藻井の意匠に見る宇宙認識

①『文選』張平子作「西京賦」¹⁶⁾

「西京賦」は、後漢の長安城の宮殿の豪華さを謳っている。その宮殿では、「倒茄を藻井に帶し、紅葩の狎獵たるを披く(藻草模様の組天井は蓮の茎がつらなり、さかさに紅の花びらが重なり合って開いている)」とする。「茄」とは、はちすといって、上に花の座をのせる蓮の茎のことであり、「葩」は、ぱっと咲いた白い花のことである。

②『文選』左太冲作「魏都賦」¹⁷⁾

「魏都賦」は、星座の名をもつ広大な文昌殿について、「綺井列なり踞きて以て蒂を懸け、華蓮葩を重ねて倒に披く(模様の描かれた天井が広がっているが、そこからは、蓮の花が下に向かって、重なり合った花びらをひらいた型の飾りが、茎によって吊されている。)」としている。

③『文選』王文考作「魯靈光殿賦」¹⁸⁾

魯の靈光殿は、前漢の景帝と程姬との間に生まれた皇子の恭王余が春秋時代の魯の遺構に建造したものである。その天井は、「圓淵方井 反植滄渠(円い池〔“圓”は大地をとりまく天空の意〕や四角い井戸のようになっており、その井桁の中に蓮(滄渠とは蓮のこと)の花が反植され〔下に向かって植えられ〕ている。)」とある。また、「雲窠藻梲、龍桷雕鏤(柱上には雲の飾り、梁の上の短い柱には「藻」水草模様が描かれ、垂木は龍の姿に刻まれている)」と記されている。このことから靈光殿では、藻の模様が描かれる場所と藻井とは別であることが知られる。

④『風俗通義』

後漢の応劭撰『風俗通義』には、「今殿作天井、井者、東井之象也、菱、水中之物、皆所以厭火也」とされる。東井は黃道二十八宿のひとつで“荷”とは蓮、“菱”とは水草の名前である。

以上漢代・三国時代の賦でみてきたように、天井の藻井は黃道二十八宿の東井を象ったもので、蓮や水草を付すのである。ここで特に注目しておくべきことは、倒茄・反植という表現で、蓮の花は天空から天下を向いて咲いている点である。『文選』「七命八首」¹⁹⁾に、高い樓閣への来訪者がみた景色が“倒景”と詠われたのは、日月を越え天球の外側に達して天球外面を見る天帝の視点を獲得したこと。逆に、天球の外側から地上をのぞき込む天帝にとって足下の蓮が天空から地上に向かって開き、その様子は地上の視点からは“倒”“反”としてみえることを意味すると思われる。すなわち、転倒している蓮は天地が相通じて天帝が地上を向いていることを示すめでたい模様なのであろう。

(iii) 第一次大極殿に藻井はあったか

藻井は、日本に現存する建築遺構がない。しかし、中世の中尊寺落慶供養願文²⁰⁾には、

奉安置丈六皆金色釋迦三尊像各一體、
右堂宇、則芝ジ藻井、天蓋寶網、嚴飾協意、丹ワク悦目、
佛像則蓮眼葉唇、紫磨金色、脇士待者次第圍繞、
三重塔婆三基、

とあり、藻井が備えられていたことが知られる。

『続日本紀』神護景雲元年四月十四日条、東院玉殿が完成した記事には、「東院玉殿新成。群臣畢會。其殿。葺以琉璃之瓦。畫以藻績之文。時人謂之王宮。」とあり、建物内部に水草を描いていたことが知られる。岩波書店の補注には建物の壁にとされるが、原文からは壁に描かれていたと読むことはできない。建物内部においては水草を描く場所は、「魯靈光殿賦」からすれば梁の上の柱ということになるが、水草の文様があるからといって、藻井の存在を示すとも限らない。平城宮第一次大極殿に多大な影響を与えたのが、唐の長安城大明宮含元殿で、その復原設計案において

も藻井が考えられている。しかしながら、第一次大極殿に藻井があったかどうかは明らかではないのである。

(4) 設計思想～宮殿は宇宙を象る～

『史記』によると、始皇帝はその二十七年、長信宮を渭水の南に造営し、ついで名を極廟と改め、天の中宮に象った。また、三十五年には復道を造り、阿房宮から渭水を渡って、これを咸陽に連結した。これは天極星（天の紫宮にある十七の星）が、閣道によって天の川を横切り、宮室に至る形に象ったとする。“宮殿は宇宙を象る”という設計思想は漢代以降も引き継がれるのである。

①『文選』班孟堅作「西都賦」²¹⁾

「西都賦」には宮殿の設計思想が直接に記される。

「大漢命を受けて之に都するに至るに及びて、仰いで東井の精を悟り、俯して河圖の靈に協ふ。（大漢が天命を受けここに都を定めるに当たって、天を仰げば、雍州の分野を司る東井の星座が、ここを都とせよと示すを悟り、地を見れば、黄河より現れ出た河図の靈妙なしるしにも、ここを都とする希望にうまく合う。）」

（中略）「其の宮室は、天地に體象り、陰陽を經緯し、坤靈の正位に據り、太紫の圓方に放ふ。中天の華闕を樹て、冠山の朱堂を豊かにし、（その宮室は、天と地の形に象り、陰陽の法に合わせて、南北、東西の方向を定め、坤の地勢の中正な位置を足場として、祭政一致の政事をする明堂を造営し、星座太微の円形と星座紫宮の方形どおりに作り上げる。天に中する壮麗な未央宮の宮門“東闕”と“西闕”とをうち建て、山上の冠のごとく朱塗りの殿堂を壮麗に構築する。）」とある。まさに宮殿は宇宙を象ることを述べる。他の宮殿に関しては次のように謳う。

「徇らすに離宮別寝を以てし、承るに崇臺閑館を以てす。煥として列宿の紫宮を是れ環るが若く、（この未央宮のそばに、離宮・別殿が輪になってめぐり、それに接するように高台やがらんとした大きな館が建っている。あたかももろもろの居並ぶ星座や紫微宮の星座が天帝の紫宮のまわりをめぐるがごとく、照りかがやいている。）」（中略）「周すに鉤陳の位を以てし、衛るに嚴更の署を以てし、（星座鉤陳の六つの星が紫微宮を守る位置にあるように、未央宮の周囲には、夜警の官署を置いて護衛する。）」

このように、宮殿が星空のようだと形容しているのである。

②『文選』張平子作「西京賦」²²⁾

「紫宮を未央に正し、峽闕を閭闔を表し、龍首を疏して以て殿を抗げ、狀巍峩として以て岌嶮たり（星座紫微宮に象り、未央宮の位置を正しく定め、高樓の門構を、紫微宮の天門、閭闔に象って、宮殿の目標とし、龍首の山を切り開いて、その正殿を高々と造る）。」ここでも未央宮が紫微宮を象ったことに注目できる。

③『文選』王文考作「魯靈光殿賦」²³⁾

「魯靈光殿賦」の序によると、魯の靈光殿は前漢武帝の皇子が建てたもので、長安の未央宮も建章宮も破壊される中、靈光殿は無事であった。これは神々が漢王朝を存続させようと守ったのではないかとある。また一方、

「然れども其の規矩制度、上は星宿に應ずるは、亦永く安らかなる所以なり（この宮殿の設計自体が天の星座の定める建築の理に叶っていたことも永く安泰であった理由なのだろう）」とする。本文中、靈光殿の詳細を見て讀えた部分でも、

「規矩天に應じ、上は穹廡に憲（その設計は、天理に則り、穹廡の星座（二十八宿の室宿と壁宿）にならっている）」としている。小結

“宮殿は宇宙を象る”という設計思想は事実をどこまで伝えているか、文学的強調を差し引いて考える必要はある。しかし、奈良時代の貴族たちが教養として学んだ漢籍『文選』にはそれが実際に記されていることを確認した。平城宮第一次大極殿院の埴積擁壁の平面プランが高御座を中心にした同心3円と、その北側に中心を持つ偏心円の交点を用いて設計施工しており、宇宙の物的な構造を具象的

に象るものであった。詩文からすると、これは天理に叶ったことであり、宮殿が永く安泰であるために必要だったのである。宮殿を天下の中心に置き、宇宙になぞらえる考えは、確実に古代日本の宮殿の設計思想に取り入れられたものと指摘できよう。

4. 高御座と大極殿

(1) 高御座の形と意味

(i) 高御座の大鏡

奈良時代の高御座の形状の由来について和田萃は、それが八角形であることに着目し、天皇による日本全土（大八洲）の支配を象徴するものとしている²⁴⁾。奈良国立文化財研究所は展示用に1/10模型を作成し、具体的状況を示している。その高御座は三層の壇からなり、方形の下層の壇の上に八角形の中層の壇がのり、その上に上層の壇（狭義の高御座）がのる。上層の壇の形態は模型では八角形としているが、不明である。その他、復元の根拠や不明点などについて概要が記されている²⁵⁾。その中高御座の蓋（かさ）を飾る調度に光芒のある小鏡24と光芒のない大鏡1があり、大鏡をいかに設えたかは紙幅の都合で記されなかった。史料を検討した古尾谷知浩氏の指摘²⁶⁾によれば、大鏡は円形で、蓋の頂部裏面に反射面を下に向けて設えるという。儀式において人に見せるという意味ではない。これをどのように解釈すればよいのだろうか。

(ii) 天の御柱

『古事記』の伝える国生み神話では、伊邪那岐命と伊邪那美命の二神は淤能碁呂島に降りて結婚をし、八つの島を生んで日本の国を生み出す。結婚の際に、天の御柱という淤能碁呂島に立った大きな柱を廻り、八尋殿²⁷⁾という御殿で結婚する。

天の御柱を廻る方向は『古事記』では、伊邪那岐命は左回り、伊邪那美命は右回りである。一方『日本書紀』では、はじめに伊弉諾尊は右回り、伊弉冉尊は左回りをするが、生まれた子供が良くなかった。そこで『古事記』と同方向で回り直して、結婚がうまくいき、日本の島々を生み出す。勝俣隆²⁸⁾によると、前者は天父神、後者は地母神の性格を有すると考えられ、二神の廻る方向は天と地の廻る方向に関係する。すなわち、蓋天説で考えるなら、北天を眺めたとき、北極星を中心に天（恒星）は左へ、相対的に地は右へ回転することになる。『日本書紀』がはじめに記す二神の回転方向は自然の摂理に反するため良くなかった²⁹⁾と解せるとし、日本の方言に北極星をしんぼし（芯星）、しんぼう（心棒）と呼ぶ例があることは、北極星を星空の回転軸で天空を支える柱だとみなしたものとした。そして、天の御柱とは、北極星に由来する天空を支える柱にみなし、その柱の立つ地上の地は世界の中心・宇宙の中心で聖なる空間と認識されていたと指摘している。

また、『日本書紀』には、天の御柱について次の記述もある。

伊弉諾尊と伊弉冉尊は、日の神を生み、その子は華やかに光り麗しく、國中を照らしわたった。そこでこの国に留めておくわけにはいかず、天に送り高天原の仕事をしてもらおうとする。このとき天地はまだあまり離れていなかったもので、天の御柱をたどって日の神を天上へ送りあげた。次に生まれた月の神も天に送った。このように天の御柱は日神・月神を天上界へ送るための通路として描かれ、天地を繋ぐ柱としても観念されていたと指摘している。

前述の通り、長安城太極宮太極殿は天の中心と地の中心を結び合わせる空間と観念されていた。日本における天の御柱に関する指摘は太極宮でのそれに通じるものであり、設計思想だけでなく空間の理念をも学んだものと考えてよい。そして、天の御柱が天に通じる通路と考えられていたことは棒状と同時に井戸のような管状のものとも言え、以下にみてみよう。

(iii) 天の御柱と大鏡の解釈

地の中心から天の北極につながる軸を天の御柱とし、藻井は父

(陽)なる天,その象徴としての天井に穿たれた陰³⁰⁾で,高御座は母(陰)なる地に築かれた陽とすると,地の陽物が天と交わるのである。天の御柱の観念を具体的に意匠化したものが高御座と藻井と考えられるのではなからうか。ともに下層が方形,中層が八角形であり,それら三層の形態は観念的には合致する形と思われる,その意味からすると高御座の上層の壇は円形でなければならないのである。天円地方とする宇宙観で,地上に設けられた円形の壇は北京の天壇や唐代長安城の圓丘にみるごとく,天との結節点として相応しい。

この柱は天を象徴した天井を突き抜け,地上と反対方向の天の北極に延びるものである。天を象徴する天井で頭を地上に向けて立つ天帝の視点では,藻井はまさに天に穿たれた井戸である。それゆえ天皇のみ覗くことができる天の井戸につながる高御座の頂には光芒のない,天水を表現する鏡が反射面を地上に向けて設えられると考えられる。その意味では三種の神器の鏡は,この鏡の代用で天地の結節点の蓋(ふた)の象徴とも理解できるのである。なお,中国では天に向かう高い楼閣の名称には,通天閣の他,漢上林苑のように井幹楼も見られる。天と通じるためには柱状であることと同時に,管のような井戸状であることも求められるのであろう。

前述したように大極殿に藻井があったかどうかは不明である。藻井がなかったとしてもその象徴的意味は鏡を伴う高御座の蓋(かさ)が担ったものと思われる。

(2) 大極殿の屋根の形態と意味

(i) 天の思想と屋根

中嶋洋典³¹⁾によると春秋期の部族は祖霊の上る星をそれぞれ持っており,部族間での戦いで勝者は敗者の社を屋根で覆った。これは社と祖霊のすみかである星の交流を断ち,その部族が再起することのないようにした。天を祀る天壇の圓丘(北京)や社稷壇に屋根がないこと,後者では祭祀の間,飛来する鳥を追い払うしきりがあるということも天との交流を妨げるものとして理解できるとする。なるほど,天壇祈念殿の三重の屋根の頂部にある宝頂は釣瓶を伏せた形態をしており,天水を汲む意味の説明が一般になされてもいる。

また,ソウルの昌徳宮大造殿は景福宮の交泰殿を移したもので,元は王と王妃の寝殿であったもので,大棟がない。これについては,陰陽の交わる所には,天地の間に妨げるものは不要とする解釈もなされている。

屋根や天井の形態は風雨を避ける機能や装飾だけではなく,意味を捉えることも必要であろう。大極殿では雨落溝の検出例がないことについて,儀式が行われる予定で雨の時は廃朝となるため,結果として大極殿で儀式の行われる時は天の気が良いときであり,雨落溝は思想的に必要ないと指摘した³²⁾。天皇が出御する時は天地の間に妨げるものはなく,天地が相通じているのである。

天井の「井」の字³³⁾は篆書では中央に点があり,釣瓶を表すという。天井が天を象徴し,そこに天に向かって井戸が穿たれるのが藻井ならば天壇祈念殿頂部に釣瓶型の宝頂が載ることも天の思想の表現として理解できる。第一次大極殿の大棟の頂部に装飾があったか,それが法隆寺夢殿の火焰宝珠のようなものであったかも不明である。しかし,天の思想から文脈的に捉えることもあながち見当はずれではないように思われる。

(ii) 屋根形態の意味

奈良時代前半の平城宮第一次大極殿については遺構が希薄であって上部構造は不明であるが,恭仁宮へ移築されたことは『続日本紀』にみえ,その大極殿の発掘調査では身屋の桁行きと梁行きの寸法が異なるため,入母屋造と考えられている³⁴⁾。一方,天平十四年(742)正月一日,恭仁宮の朝賀では大極殿の移築がまだ完了しておらず,四阿殿を仮設している。四阿殿は寄棟造の建物で,本来大極殿は寄棟造の屋根であったと考えられている³⁵⁾。

奈良時代後半の平城宮第二次大極殿については身屋の桁行きと梁行きの寸法が同じで,屋根構造は寄棟造りに復原されている。その理由として,東大寺や唐招提寺金堂は寄棟造であること,中国では寄棟造が宮殿建築の最高級屋根とされ,8世紀は唐制の移入に熱心であることをあげている³⁶⁾。

第一次大極殿はもともと藤原宮で建造された大極殿で,それが平城宮へ移築されたと考えるのが有力である³⁷⁾。寄棟造の屋根は降り注いだ甘露を四方の民にあまねく分配できるような形であり,天子の徳を示す形態と解釈できる。しかしながら,唐との国交回復前に成立した大極殿であるため,どこまで思想を理解して造営したか,柱配置が重層の屋根形態を規制したのか等は検討課題であり判断の難しいところである。

(iii) 大極殿の屋根瓦の色の意味

平城宮第一次大極殿の屋根に葺かれた瓦は黒色が強いことが特徴である³⁸⁾。中国の北魏以来の伝統を受け継いで長安城大明宮含元殿,麟徳殿など重要な宮殿では黒色摩研瓦を使用している。このため奈良時代初期の一時期,こうした伝統を模倣したかどうかは検討課題とされる³⁹⁾。第一次大極殿で黒色の瓦が用いられる現象は瓦の制作技法の系譜から理解することも可能であろうが,思想的に捉えてみる検討も必要と思われる。

大極殿では柱は丹塗り,壁は白い漆喰塗り,連子窓は緑青塗りと考えられる。大極殿をはじめ,重要建物の壇上積基壇の化粧に使われる石材は凝灰岩で,黄色味が強いことが特徴となっている。

大極殿の名は『易』の太極に由来し,太極は陰陽の分かれていない混沌とした状況(これは『日本書紀』の冒頭にも記される),宇宙の根元のことである。世界の事物は,陰と陽の二つの気と,その陰陽の交感より生まれた木火土水金の五元素によってつくられるとされる。この五元素の運行を五行といい,五行は方位や色彩,時間,事物などを象徴する。自然と文化の調和を図るよう,こうした陰陽五行思想は都市プランの細部や城門や寺院の名称などに多用されるのである。すなわち,瓦が黒いことは,大極殿全体で五色を用いることになり,大極殿が陰陽の複合体であり,五行の体现となる。さらに黒は五行では水にあたり,先の天井の意味同様,火気をきらう建物の屋根では都合がよいことになる(棟に鯢がのることや民家の蔵に水と記されるのと同様である)。

(3) 中国古代建築の設計理論

「宮殿は宇宙を象る」という設計思想をみたが,その方法には具象的な方法と,抽象的な方法がある。前者の方法は,上にみた通りであり,北京の紫禁城(故宮)も例としてあげられる。紫禁城は明清時代の宮城であり,その名は北極星近くの紫微星からとり,宮城内には天の川を象る金水河が流れる。

一方,後者の方法としては陰陽五行思想と密接な“月令図式の宇宙論”という設計原理が重要視された⁴⁰⁾。陰陽五行思想とは,陰陽説と五行説が合わさり,易の思想の中核をなすものである。陰陽説はすべてのものを陰陽の二元論で捉えようとするものであるが,陰陽は同根のものとして,交感・交合するとみる。陽には天・男・左・剛・春・太陽(日)・奇数,陰には地・女・右・柔・秋・太陰(月)・偶数などがある。五行は万物を構成する木火土水金の五つの要素とその働きのことをいい,時間と空間,色,数などにも五行を割り当てた。易はこれらを組み込んで変化する現象を数に変換して思考し,宇宙の秩序法則を理論付けた。

さて,月令とは,儒教教典『礼記』にある古代中国における一年十二ヶ月の星座,気候,行事,為政者の行いなどを記したものがある。この世の万事万物は季節・方位に基づいて循環・調和・変化し,時間と空間(時間のことを宙といい,空間のことを宇という『淮南子・斉俗訓』)は連携した有機体(時空のことを宇宙という)を構成しているという考えに基づくものである。“月令”図式とは,この世の万事万物が季節,方位にもとづいて循環・協

調・変化するという一種の宇宙図式あるいは世界図式と呼べるものを指す。「月令図式の宇宙論」では、建物が時空と調和するように計画するのである。

具体的には、東の門は迎春門、西の門は千秋門などと名付けたる他、建物の柱の数を四季、十二支、黄道二十八宿などに因み、数字を介して、時間と空間という意味の抽象的な宇宙を象るのである。こうした事例を現存する建築では北京の天壇にある祈念殿⁴¹⁾ やソウルの景福宮慶会楼⁴²⁾、慶州の瞻瞻星台（石材 366）等に見ることができる。祈念殿では下層の二十八本の柱は二十八宿、中層の十二本の柱は十二支、上層の四本の柱は四神を象するという。祈念殿東側にある長廊と呼ばれる七十二間の回廊は、一年を五日ごとに区切った季節の七十二候を象ると思われる。

このように現在の中国・韓国においても宮殿等の建物が宇宙を象ることを確認できるのである。

また、隋の官僚建築家宇文愷は、中文帝による大興城、煬帝による東京城の 2 都市の都市建設計画にも重要な役割を果たした人物である。文帝・煬帝による兩次の明堂復興計画にも主要な役割を果たし、明堂は実現こそされなかったが、『隋書』の伝に附された編者の評には「書籍を考覽し、『明堂図』を定めたことについては、意をもって解釈しすぎる点があるとはいえ、観るべきものがある。」と一定の評価が下されている⁴³⁾。『隋書』巻六十八には、『明堂議表』の全文が掲載され、上述の設計方法を用いていることが確認できる。その『隋書』を『日本書紀』が引いている事実があることを先にみた。

さらに、こうした設計理論は中国や朝鮮半島の宮殿や都城、陵墓だけでなく、日本のキトラ古墳でも認めることができる。キトラ古墳の石室壁画には四方を示す四神図の他、時間を象徴する十二支像が獣面人身の形で示されているのである⁴⁴⁾。

(4) 大極殿院の設計思想

大極殿の身舎は柱間 7 間・桁行 2 間で、四面に廂がつくため全体で 44 本の柱を有する。中心近くの柱に四神、それを囲むものに十二支、その他に二十八宿が配せよう。大極殿院全体の設計思想や建物配置だけでなく、大極殿内の壁画の画題にも密接に関わるものと思われる。

大極殿院の回廊は桁行柱間に 15.5 尺という半端な数値を用いて、回廊心々では 70 間であるが、南北端々では 72 間にしている⁴⁵⁾。72 という数字も時空という意味での宇宙を天皇が支配することを示していると思われる。

中国の伝統文化では数は哲理的な意味をもっていた。宇宙現象を数字で説明するのが象数学で、算術は暦法を媒介にして天の意志を知ることができるとされた⁴⁶⁾。天人相関理論に基づいて天意として現れる現象を解説する知識体系と未来を予知する技術、それらを用いた治世術を術数という⁴⁷⁾。天道に基づいて天下を治める為政者は、その拠点である宮殿を造営するためには、宇宙の構造を把握し、その設計に術数を用いる必要があったのであろう。

まとめ

平城宮第一次大極殿院の塼積擁壁の平面形は『文選』で確認した設計思想同様、具象的に宇宙の構造を象る。また、柱の数などでは抽象的にも宇宙を象るのである。天下の中心に宮殿を建て、天の御柱につながる高御座が、宇宙の中心でもあった。『古事記』『日本書紀』に記される神話や初期の天皇の話は、政治的な物語としても理解されるべきものである。これらの完成は順に和銅五年（712）、養老四年（720）で、平城遷都は和銅三年（710）であるが、第一次大極殿の実質的な御披露目が蝦夷や南方の島民も参列した霊亀元年（715）元日の朝賀である。記紀も平城宮第一次大極殿院も天皇による支配正当性を顕示し、国家の勢威を誇示した同時代の政治的な作品として理解できるのである。

補注及び引用文献

- 1) 内田和伸（2003）：平城宮第一次大極殿院前庭のデザインとその思想：ランドスケープ研究 66（5）、361-366
- 2) 内田和伸（2004）：大極殿院の規模とその思想・計画・設計に関する一考察：ランドスケープ研究 67（5）、361-364
- 3) 内田和伸（2005）：大極殿院の設計思想と出土遺物の解釈：ランドスケープ研究 68（5）、445-450
- 4) 妹尾達彦（2001）：長安の都市計画：講談社選書メチエ、138-141
- 5) 中島千秋（2000）：文選（賦篇）上 新釈漢文体系：明治書院、5-10
- 6) 国史大辞典（1992）：吉川弘文館、905-906
- 7) 前掲註 5）141-148
- 8) 高橋忠彦（2000）：文選（賦篇）中 新釈漢文体系：明治書院、9-10
- 9) 加藤遥訳 程萬里主編（1991）：数理設計：中国伝統建築：中国建築工業出版社、18-24
- 10) 小沢毅（2003）：日本古代宮都構造の研究：青木書店、244-249
- 11) なお、藤原宮・京の中心は廟ではなく、大極殿院南門である。天皇家の廟といえる伊勢神宮はこのほぼ真東に立地する。東の伊勢に対しては西の出雲になる（荒川紘（2001）日本人の宇宙観：紀伊国屋書店、43-90）ので、右にある社は出雲大社とし、「左祖右社」の原則に則るのであろうか。また、大極殿院南門は射礼の行われる場所であった（阿部健太郎・内田和伸（2004）：「射礼」の復原に関する基礎的研究：遺跡学研究 第 1 号、7-24）。漢代、洛陽の正殿徳陽殿の東に設けられたのが辟雍（大学）で、西に設けられたのが霊台（天文観測所）であった。辟雍では才能の有無を、弓を射る射礼の儀式によって選り分けたことが、『文選』『東京賦』（152-153、167-169）に記される。周・魏・唐などは重要建物が南北に並び、秦漢では東西に並んだ。漢代の東西軸が南北軸に変換され、辟雍の役割の一部を正殿の南の大極殿院南門が担ったとすると、北に霊台相当施設が建てられることになるうか。
- 12) 石川忠久（2001）：詩経（上）新釈漢文大系：明治書院、110、140-143
- 13) 前掲註 2）に同じ
- 14) 田中淡訳編（1981）：中国建築の歴史 中国建築史編集委員会編：平凡社、211
- 15) 竹島卓一（1971）：营造法式の研究 二：中央公論美術出版、384-388
- 16) 中島千秋（2000）：文選（賦篇）上 新釈漢文体系：明治書院、87-90
- 17) 高橋忠彦（2000）：文選（賦篇）中 新釈漢文体系：明治書院、10-13
- 18) 高橋忠彦（2001）：文選（賦篇）下 新釈漢文体系：明治書院、9-12
- 19) 高橋忠彦（2001）：文選（賦篇）下 新釈漢文体系：明治書院、165-169
- 20) 佐藤弘弥氏が平泉町史所収（中尊寺所蔵、顕家書写本）を使用し、日本史料（2）中世（岩波書店 1998 年）を参考にして 2000 年に作成したものを氏の H P より引用。
- 21) 中島千秋（2000）：文選（賦篇）上 新釈漢文体系：明治書院、25-28
- 22) 中島千秋（2000）：文選（賦篇）上 新釈漢文体系：明治書院、87-90
- 23) 中島千秋（2000）：文選（賦篇）下 新釈漢文体系：明治書院、9-12
- 24) 和田萃（1984）：タカミクラ一朝賀・即位をめぐる：日本政治社会史研究上：塙書房、235-268
- 25) 古尾谷知浩・箱崎和久（1995）：奈良国立文化財研究所年報 1995：奈良国立文化財研究所
- 26) 以下は古尾谷知浩氏のご教示の一部。鏡に関する記載は『延喜式』内蔵寮式・内匠寮式にある。内匠寮式では、八角形の高御座の蓋（かさ）を裝飾する記事の中に、「毎面、懸鏡三面、当頂著大鏡一面」とある。つまり、各辺に三面ずつ小鏡を付け、頂部に大鏡を付けることになるのだが、「頂」といっても、蓋の上には大きい鳳像を載せる規定になっているので、天井の頂部のことと考えられる。また、『頼業記』久寿二年十月十六日条では、南北二辺に小鏡 5 面、残り六辺に小鏡各 3 面を付けたとした上で、「蓋裏中央、付大円鏡一面」とあり、ここでは鏡の形は円であることがわかる。さらに、『文安御即位調度図』によれば、「蓋裏内着大鏡一面（以鏡裏、令通入、以六寸釘、固之）」とある。難解だが、鏡の裏に釘を通して固定するということであり、紋様面は上になると考えられる。
- 27) 八尋殿が八角形の高御座のことで一辺が一尋（六尺）とすると、対辺の距離は 14.5 尺となる。高御座の規模の復原に参考になるうか。
- 28) 勝保隆（2000）：星座で読み解く日本神話 あじあブックス：大修館書店、65-83
- 29) 前掲註 3）では、左旋する恒星の中を右に動いていくのが日月五星（七曜）で、七曜の右への順行を天帝に願ひ、その了承にされたためでたい微（乾符）をデザインしたのが難波宮出土の右裏字の重圈紋軒瓦であったことは既に指摘した。
- 30) 太極図にみるごとく、陰陽説には陽中の陰、陰中の陽という考えがある。
- 31) 中嶋洋典（1986）：五色と五行：世界聖典刊行協会、126-135
- 32) 前掲註 1）
- 33) 最近、松村恵司（2005）：古代銭貨の銭文：文字と古代日本 4：吉川弘文館、78-103）によって、富本銭や和同開珎の銭文について解釈がなされ、長きにわたる論争が終わったようである。和同開珎の開の字に使われる「井」の字と、通宝に使われる「通」の字については、上記の文脈から井が天に通じる意味で解釈できると思われる。
- 34) 岡田英男他（1981）奈良国立文化財研究所学報 XI：奈良国立文化財研究所、236
- 35) 青木和夫他（1996）：続日本紀二 新日本古典文学大系：岩波書店、401
- 36) 上野邦一・浅川滋男（1993）：建築遺構の復原：平城宮発掘調査報告 XIV：奈良国立文化財研究所、179-180
- 37) 前掲註 10）、347-349
- 38) 清野孝之（2004）：大極殿院の屋根の色：奈良文化財研究所紀要：奈良文化財研究所、33
- 39) 佐川正敏（1992）：中国の軒平瓦の成形・施工技法を考えるー東アジアの造瓦技術の比較研究 Iー：日本中国考古学会会報第二号：日本中国考古学会、1-13
- 40) 中国之伝統建築（1991）数理設計 加藤遥訳：中国建築工業出版社、18-24
- 41) 劉興起（1993）：天壇：中国旅遊出版社、31
- 42) 現地説明板より。
- 43) 田中淡（1989）：中国建築史の研究：弘文堂
- 44) 来村多加史（2005）：キトラ古墳の壁画は語る：生活人新書 NHK出版
- 45) 田中哲雄・町田章他（1981）奈良国立文化財研究所学報 XI：奈良国立文化財研究所、236
- 46) 細井浩志（2004）：奈良時代の暦算教育制度：日本歴史第 677 号：吉川弘文館、1-16
- 47) 馬場理恵子（2004）：「術数」概念の成立と漢代術学：京都女子大学大学院文学研究科研究紀要史学編第三号、pp.1-33